[15]

氏　　名	グローガン　マイルズ（ぐろーがん　まいるず）
博士の専攻分野の名称	博士（外国語教育学）
学　位　記　番　号	外博第 32 号
学 位 授 与 の 日 付	2021 年 3 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学　位　論　文　題　目	Making the Grade:An Investigation into the Creation and Meaning of Grades in University EFL Classrooms in Japan
論　文　審　査　委　員	主 査　教　授　竹内　理 副 査　教　授　吉澤　清美 副 査　教　授　水本　篤 専門審査委員　准教授　小泉　利恵（順天堂大学）

論 文 内 容 の 要 旨

Grogan Myles 氏の博士学位請求論文 *Making the grade: An investigation into the creation and meaning of grades in university EFL classrooms in Japan.*（成績評価―日本の大学における EFL 授業での評価と成績の意味に関する研究）は、4 つの研究を中核として、以下の 7 章から成り立っている。

第１章：Introduction（導入）
第２章：Literature Review（成績評価や研究手法に関する先行研究のまとめ）
第３章： Study　１（研究　１―　Q方法論を用いた研究：学生の視点から）
第４章： Study　２（研究　２― 主題分析を用いた研究：運営者の視点から）
第５章： Study　３（研究　３― 主題分析を用いた研究：教員の視点から）
第６章： Study ４（研究　４― レパートリー・グリッドを用いた研究：逆行分析の視点から）
第７章： Conclusion（結論）
References(参考文献、198 編)
Appendices (A-C)（付録３編）

日本の大学生にとって、英語の授業は必須科目であることが多い。また、総合大学の場合、

学部間で学生の英語能力の差が大きく存在しているにも関わらず、大学としては、同じ名称で英語科目の単位を付与していることも多い。このようなことから考えると、日本の大学の教養英語科目においては、その成績が意味するものを明らかにすることは、一筋縄ではいかない作業といえる。本博士論文は、このような問題意識を念頭に、大規模総合大学で実施した英語科目の成績評価に関する事例研究を、Exploratory Practice として、まとめたものである。そこでは、導入されたばかりの教養外国語カリキュラムの必須科目である「英語 Ⅰ」（スピーキングおよびリスニング）の取り組みを長期にわたり追い、成績評価のあり方や、それが学生や教員（契約常勤講師、非常勤講師）、大学の運営者にもたらす影響・反響について明らかにしようとしている。言い換えると、本博士論文の達成目標は、成績評価がどのように行われ、その過程がどのように形成されるのかを明らかにすることとなる。

第 1 章では、研究課題の概要と、本研究で採用した方法論（Q 方法論、主題分析、レパートリー・グリッド発展手法から構成されるマルチメソッド・アプローチ）が、今回の課題解決になぜ適しているのかについて詳述している。加えて本章では、事例研究が行われた大学と英語カリキュラム、および英語Ⅰという科目について詳細に記述している（この記述のおかげで、本研究の成果を、読者にとってなじみ深い他の環境や文脈に転移させることが、ある程度可能となっている）。

続く第 2 章では、問題の背景をより詳しく説明するために、評価に関する様々なアプローチの概要、教室内評価のこれまでのあり方、および評価に関わるステイク・ホールダー（学生、運営・管理者、および担当講師）について調べた文献を、関心相関的に紹介している。

第 3 章（研究 1）では、学生の視点から、Q 方法論を用いて、成績付与に関する経験を解明している。この手法では、英語Ⅰの成績評価に関する一連の意見を、一定の分布で参加者（コース・レベルを考慮に入れて、合計 104 名）にランク付けしてもらう形でデータを集めている。こうして得られたデータは因子分析にかけられ、その結果、6 つの因子が抽出された。このことは、成績評価には複数の解釈があること、つまり、何をもってして「良い」成績とするのかについては、学生の間でも意見が割れていることを示唆しているといえよう。ただし、低い成績を付与されるのは自身の怠惰の結果である、という自己責任の考え方は学生間で広く受け入れられており、さらに全体的には、学生は（対象となった大学の）成績評価や採点のあり方に満足していると報告されている。

第 4 章（研究 2）では、教養英語科目の運営者（専任教職員）の視点や、成績評価の利用者（たとえば学部専門科目の専任教員）の観点から、成績評価についての解明を試みている。データの収集方法はインタビュー（対象者は 14 名） であり、そのデータは主題分析（thematic analysis）の手法で分析されている。その結果、英語の習熟度に関する考え方と、学生の成長に関する考え方の2つの概念が浮かび上がってきた。前者は、英語の習熟度（あるいはレベル）をどう示せば良いかというジレンマを含んでおり、絶対評価に基づいた

科目運営の持続可能が、必ずしも高くない危険性を示唆している。後者は、習熟度では測れない変化への期待を含んでおり、事例研究が行われた大学のディプロマ・ポリシーの考え方を反映しているものとなった。加えて、成績評価に係る様々な矛盾点・困難点について、トップダウン的に押しつけて解決するのではなく、担当講師たちが中心となって、彼らのネットワークの中でボトムアップ的に解決していく方法が有効であることも報告している。

第 5 章（研究 3）では、外国人常勤講師（任期付教員；参加者合計９名）が、新しい教養外国語カリキュラムと、その中の「英語１」という科目に適応していく過程を追った。データ収集の方法はインタビューで、初回の授業後と科目の採点を終えた学期末とに、２回実施されている。得られたデータは、主題分析の手法によって分析された。参加者の講師たちは、何をどのように評価するすべきなのか、大まかな理解からスタートし、学期が進行するにつれて、徐々に評価の方法に適応していったことが判った。またその過程においては、所属する機関の専任教員や同僚の任期付教員よりも、身近にいる同業の親しい仲間からの意見が、重要な役割（つまり、一種の「アプレンティスシップ」の機能） を果たしていることが分かった。また、彼らは成績付与の過程で、大学から決められている方法や条件に対しては不満や異議を持っており、自身の裁量の自由を求めているようであった。ただ、そのことがパワーバランスの中で実現されない状況にあることも、同時に感じていると指摘されていた。

第6章（研究 4）では、学期末に学生へ付与された成績から、その付与過程や、影響する要因を探るというリバース・エンジニアリング（逆行分析）のアプローチを用いることで、成績の生成と意味について検討している。合計７名の非常勤講師を対象にインタビューを実施し、彼らから成績評価を受けた学生を、それぞれの最大 2名分、レパートリー・グリッド手法（評価構造を明らかにし， 視覚的に階層構造を表現する手法）を利用して説明するように依頼した。得られたデータに対しては、主成分分析(PCA)が行われ、構成概念について 7 名の講師間で比較がなされた。その結果、各講師の PCA から明らかになった成績評価の共通構成要素（メタ的な構成要素）は、2つだけであった。1つ目のメタ要素は、語彙、文法、そして教科書に基づいたスキルを含む、外国語能力の領域を反映しているという。一方、2つ目のメタ要素は、大学生コミュニティーの「アプレンティスシップ」の領域を反映しており、ノートの取り方であったり、教室に早目に到着することであったり、同級生と交流することであったりという、広汎なメタ認識が含まれていたという。著者はこれらの結果に基づき、成績評価のレベルと、それに関連する行動のモデルを作成し、章末に提示している。

結びの第 7 章では、本研究の限界点についての議論が行われている。指摘された限界点としては、（1）単一の環境・文脈に注目したため（つまり、便宜的標本抽出のため）、この特定の環境・文脈を越えて、本論文の結果を転移させる可能性が限られてしまっていること、(2) 結果確認のためのメンバーチェックが、ロジスティックの問題があるとはいえ、行われていないこと、（3）本研究で使用した方法論の一部（Q 方法論やレパートリー・グリッド手法）は、英語教育学の分野ではまだ広く使用されていないため、結果の比較・対照が難しいこと、さらには (4)

本研究の主観的な性質から、解釈にバイアスが出ている危険性があること等があった。その後、著者は、研究結果を振り返ってまとめ、将来への課題などについて言及して、論文を締めくくっている。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：竹内　理、吉澤清美、水本　篤）は、Grogan 氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうか確認した。その結果、同氏は、（１）必要単位（10 単位）を取得済みであり、博士論文のテーマと関連する分野で（２）論文５編（うち査読あり国際研究誌１編、国内全国研究誌１編）を公刊し、(3) 口頭発表を7回（うち国際学会 4 回、全国研究大会２回)行い、(４）博士論文聴聞会（2020 年 8 月 6 日開催)も重大な問題の指摘なく終了しており、論文提出のすべての要件を満たしていることが確認できたため、研究科委員会（2020 年 9 月 23 日開催）に報告し、同氏からの論文提出を認めるとの了承を得た。その後、2020 年 10 月 30 日（コロナ禍の影響のため提出期限を１ヶ月延期）に Grogan 氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会（2020 年 11 月 25 日開催)において承認された論文審査委員会（主査：竹内 理、副査：吉澤清美、副査：水本 篤、学外委員：小泉利恵順天堂大学准教授）での審査に入った。また、所定の手続きと閲覧期間をもって、研究科専任教員への論文開示も行った。

提出された英文論文（180 頁）では、広範囲に文献の渉猟を行っており、参照論文の数は198編にのぼっていた。これらの文献を精査し、日本の大学における教養英語科目の成績付与とその意味というテーマを選定し、その後に４つの実証研究に取り組んだことは、手法の手堅さの面から高い評価に値するものと言えよう。また中心となる実証研究では、新しい研究手法を果敢に導入し、従来は得られなかったような知見に至っている。ここには、先進性を重んじるGrogan　氏の研究アプローチが、余すところなく顕れているといえる。

上記に加え、以下の４点からも本論文は優れているものと判断する。

(i) 前例のほとんどない領域・対象に焦点を当て、様々な知見を得ていることから研究に独創性が認められること、

(ii) データ源を多様に組み合わせ、解釈の重層性を実現していること、

(iii) 現象の指摘だけではなく改善方法まで提案しようとする試みは、外国語教育学の博士学位請求に相応しいと考えられること、および

(ⅳ) 上述の成果が国際学会でも４回発表され、査読付きの国際研究誌、全国学会研究誌にも、それぞれ１編ずつ掲載されるなど、その有用性が国際的にも高く評価されていること。

なお、本論文の研究では、参加者に対して十分な説明を行い、彼らが同意のもとで参加する（あるいは辞退する）形式を採用していた。また、匿名性も担保されており、研究のいかなる時点でも、自らの意思でデータを撤回することを参加者に許容していることから、研究倫理の面でも問題がないものと考えられる。

上記を受けて、Grogan 氏の学位請求論文が、研究の方法や内容、倫理的配慮、記述の体裁や論理などすべてにおいて、本研究科の博士号に値する水準に達していることを、審査委員会一同が認めた。